近藤芳美

少年の詩（うた）

青春の碑序篇

少年の詩（うた）

青春の碑序篇

近藤芳美

筑摩書房

少年の詩（うた）

一九八〇年一二月二〇日　初版第一刷発行

著者　近藤芳美

発行者　布川角左衛門

発行所　株式会社筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京二九一一七六五一（営業）
二九四一六七一一（編集）
振替口座東京六一四一二三
郵便番号一〇一九一

印刷　株式会社理想社
製本　和田製本株式会社

カバー装画　アカンサス　今西英雄

©1980 Yoshimi Kondo

Printed in Japan 0095-81129-4604

少年の詩　目次

少年の詩

一 記憶 3
二 海潮 11
三 薄暮 18
四 起伏 29
五 凍土 36
六 曠野 45
七 桜花 56
八 光芒 66
九 岩襞 76
一〇 聖歌 87
一一 妖精 99
一二 異郷 111
一三 少年 121

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

冬の日記
一　雪　135
二　街　151
三　灯　163
箸・その他
一　箸　177
二　小石　182
三　眼鏡　187
四　軍袴　192
モスクワのことなど
一　ウクライナ・ホテル　199
二　サルビヤ　204
三　通訳　209
四　寺院　214

五　平　和　219
六　ざくろ　224
台風前後
台風前後　231
後　記　239

少年の詩（うた）

青春の碑序篇

一　記　憶

ふと、壁にうつし出される、古い幻燈画のようなきれぎれのまぼろしがある。ほの暗い、揺らぐランプのあかりに照らし出されて、それは動くこともなく、あとさきもない。そのひとつひとつのまぼろしは鮮やかではあるが、捉えようとすれば消えてかたちもない。わたしたちの遠い幼い人生の最初の記憶は、そうした幻燈画の、幾枚かの断片のようなものから始まるのであろうか。

その画面の中で、わたしは懸命に床板の上を這っている。床板は大きく、冷え冷えと飴色に磨かれて外光を照り返している。農家の、厨につづく板の間であろうか。灰を均した囲炉裏があり、そこには近付いてはならない。囲炉裏の向うで這い寄るわたしを待っているのは膝を揃えたひとりの老人である。背が高く、袖無しの羽織か何かを着、柔和な笑みをたたえて幼いわたしを見下している——

それを祖父と、どうして知っていたのであろうか。

さらにまた、わたしはひとりの少年の肩に乗せられて家を出る。少年はわたしを屋敷下の峡田

の水車小屋に連れて行こうとした。匂い立つ稲の間を分けてつたう畦道を、心細いまま見知らぬ少年の頭に縋っていた。

二つの記憶は、あるいは同じときではないのかもしれぬ。少年はわたしの叔父——父の末弟だったはずである。

朝鮮で銀行員をしていた父が、生れた長男のわたしを伴って帰国し、ふるさとの、その生家を訪れたのはいつだったのか。わたしがまだ、床を這うような年齢の日だったのか。

そこは中国山脈の、浅い枝脈の谷あいの農村のひとつであった。広島県世羅郡西太田村字青水——今は世羅町と呼ばれる。瀬戸内海からも日本海からも、いくつもの峠を越えて入らなければならない僻村とも言えるが、一帯は太田の荘として、古代日本史に早くから現われる荘園の名で知られた。父はその村の、数町の田を自作する中農ほどの家の次男であった。

祖父は亀太郎といった。代々の農民ではあったが、若いときに一度志を抱いて東京に出た。明治の初年、東京が江戸から名を変えて間もなかったのであろう。そうして、そこには新しい維新後の時代が始まる一国の首都として、祖父のような青年の夢を誘う何ものかがあったのであろう。

彼が東京でどのようなことをしたかは知らない。志はくじけ、再び山村の家郷に帰って来たとき、なぜだか唯一つ、大きな柱時計を土産にした。持って戻った柱時計は古風な刻を打ち、村人たちはその音を聞くために物珍しげに家に集り寄った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

帰郷した祖父はそれから周囲の農民に種籾を貸しながら田をひろげ、晩年に、門構えのある赤い石州瓦の二階家を建て、近隣の目を見張らせた。わたしが父に連れられて帰ったのもその家だったのであろうか。

そのような血を父たちも受け継いでいたのかもしれない。父の長兄――わたしの伯父もまた青年の日に村を出、東京の、英語学校か何かに学んだ。そうして祖父と同様に志を得ず、帰って来ると、今度は得度して僧侶になろうとした。結局、家を継がなければならなかったが、人々にかつがれて長く村長をし、戦時中に「草鞋村長」の名で県下に知られるほどになった。

そのためもあって敗戦ののちに追放になり、同時に、祖父の代からの家産も蕩尽した。死後一家は離散、かつて村長であった村役場のあとの街道脇に、御影石の頌徳碑が一つだけ残されることとなった。

次男の父は得三という。彼もまた長兄である伯父を追うように勉学を志し、村の小学校を了えると尾道の商業学校を受験した。尾道は瀬戸内海の旧い港町であり、父のふるさとからは最も近い都会でもあった。

早くから学費の足しにしようとして、村人の家に雇われて草刈りをしたりし、その鎌の傷あとが生涯指に残っていた。ただし、父がそうした幼い年齢で村を出ることを思ったのを、向学心と

だけで言ってしまうのは本当ではあるまい。中農とは言ったが、そこには農民の次男である父たちの口を養うほどの田はなかったはずである。父の何人かの弟らもそれぞれに、やがて、何らかの道を求めて家を離れ、村を去らなければならなくなる。それは、彼の一家にかぎるのではない。

尾道まで、峠と谷間とをつたう三十幾粁かの山道があった。その道を、ひとり試験に向った。始めての旅である。当時、ふるさとの村の近くまでようやく電報が届くようになり、電信線が張られていた。それに添ってどこまでも歩めば、尾道に出られるに違いないと父は思った。草鞋を履き、母が作ってくれた弁当を、書物とともに雑嚢に入れて肩にした。そうして、山道につづく一本の電線の、新しい電柱の行く手を、心臆せずたどった。同じ道を、時々犬に前引きをさせた人力車が追い越し、そのようなことも幼い父には珍しかった。星が出て、追い越す人力車には提灯がともり始めていた。

夕暮にひとつの尾根を過ぎ、眼下にひろがる海を見た。海に添って尾道の港の灯があった。

尾道商業を卒業すると、父はさらに神戸の高等商業に学んだ。東京の一つ橋に次いで、神戸に、日本で二番目のその専門校が創設されて間もない日であった。

それはまた明治の、日露戦争勝利の直後の時代とも重なろう。戦勝とともに日本は大陸の殖民地侵攻の足掛りを得、国に産業勃興と海外雄飛の夢が輝かしいまでに燃えた。すでに農民の一少年ではない父に、時代の夢は同じように育まれていたに違いない。

神戸の高商でも父は、働いて学費を得なければならない貧しい学生のひとりとして教室に通ったが、同じようにボートをも漕いで青春の生活を享受した。背が低いため、ボート仲間では舵手にしかしてもらえなかったのであろう。商業会計をみずからの専攻と思い、数学――というよりは計算を得意とした。後年まで、父は煩瑣な帳簿上の計算などを算盤を用いず、素早く暗算ですませた。

明治四十三年、学業を終えて韓国の銀行に職を得た。韓国大邱の、慶尚農工銀行という、半官半民の小銀行であった。初任給五十五円。渡航に二等の旅費の支度料が出た。

日露戦争ののちに統監府が置かれ、韓国はすでに日本の保護国となっていた。だが、その地が、海を隔てた遠い異国であるのは変らない。高商を卒業した父がなぜにそうした遠い国に仕事を求めようとしたのであろうか。それを、当時の青年の海外雄飛の思いとのみは言い得ない。

尾道の学校から神戸への進学にかけて、父は祖父からも、また村の親戚からも、働いて返済する約束で学費の金を借りていた。そのためにも、就職は少しでも有利な条件を選ばなければならなかった。五十五円の給料と二等旅費の支給という異国の職場は、貧しい日本の学生にとっては魅力だったのであろう。

始めて関門海峡を渡った。そうして、大邱の町に赴任した。韓国の、慶尚北道の道庁所在地である。その韓国が、殖民地として亡国の寸前にあることを、父はどれほどに知り、どれほどに思

っていたのか。

日本の特派大使、伊藤博文が韓国皇帝に迫ってこれを保護国にしたのが日露戦争直後、明治三十八年十一月、次いで統監府を首都京城に設置してみずからが初代統監となる。外交権を奪い、警察権を奪い、さらにハーグ密使事件を責めて皇帝を譲位に追い、ついに軍隊をも解散させた。併合への布石は、背後の武力の威喝とともに次々に進められていたと言ってよい。

その伊藤博文は哈爾浜（ハルビン）の駅頭で韓国人安重根に暗殺される。父の、赴任の前年である。

当時、統監府による内政指導の一つとして、韓国では近代化のための貨幣改革が実施されていた。それは、葉銭という、それまでに通用していた悪質の穴明き銭を回収し、日本から送られて来る新たな貨幣に替えようとする財政上の施策であり、各地に設立されていた農工銀行もその業務を担った。

着任したばかりの父に、最初に与えられた仕事はそうした貨幣の現送であった。新しい貨幣は袋詰めにされて三頭の朝鮮馬の背に積まれ、父は通訳と、三人の補助憲兵とともに別の馬に乗った。現送の目的地は奥地の邑々であり、そこは国情の不安に、治安が保たれているとは言えなかった。護身に、父には銀行から拳銃が貸与された。通訳も、補助憲兵も韓国人である。旅する先は無論、始めての、知らない異邦の世界であった。

目的地に着き、現送の任務を終えると補助憲兵らは姿を消した。それからは護衛の要がないから、ということだった。帰途は通訳と二人。小心な通訳はそのあいだ、父から奪うようにして借りた拳銃を身に抱いて、決して離そうとはしなかった——

多分、そのときのものであろうと思われる一枚の写真が、黄色く褪せて少年の日までわたしの家には残っていた。父は韓国人の姿をし、馬に乗っていた。馬はずんぐりとした、脚の太い朝鮮馬である。銀縁の眼鏡を掛け、口を結んだ表情は凜々しく、若々しかったが、なぜだか頭には貴族たちがかぶる先の左右に開いた冠をつけていた。並んで写る通訳は、まだ髷を結ったままである。

父が大邱に着任した年の夏、韓国は日本に併合された。明治四十三年八月二十二日である。併合の条約はときの統監、陸軍大将寺内正毅と韓国総理大臣李完用のあいだで結ばれたが、それはもはやどうにもするすべのない歴史の怒濤と言えた。以後、国号を朝鮮と改め、統監府に代って朝鮮総督が京城、南山中腹に置かれる。寺内大将は引続き総督となった。狡猾、傲慢。武断政治家として知られていた。

わたしにひとりの母方の大叔父がいた。そのころ、まだ若い尉官の将校として、京城の日本軍駐屯部隊に配属されていたという。八月二十二日の前夜、彼は隠密の命を受け、武装し弾薬を分け持った一小隊ほどの兵を引き連れて王宮に至り、その門の、石橋の下に彼らをひそませた。事

があればただちに王宮の奥に入り、高官らを殺害する手筈になっていたと、後の日に回想として告げてくれたことがあった。併合はそのような異様な事態のうちに行なわれた。

併合の翌年か翌々年、父は大邱から、さらに馬山という半島南海岸の町の支店に転勤し、そこで母と結婚をした。そうして、生れたわたしを伴って始めての帰郷をした。

そうであれば、大きな農家の、暗く冷たい床板を這いながら見上げた、祖父という人の笑顔の記憶はそのときのものと言うほかはないのであろうか。もしくは、それは本当にわたし自身の幼い記憶であったのか。茫々とした意識の彼方のかげであり、遠く、追い求めるすべもない。

祖父はそれから数年を経て死んだ。しらせの電報を受け、父が声をあげて泣いていたのを覚えている。同じ朝鮮の、金泉というところにいたころである。わたしは、あるいはその時からは再び祖父に逢わなかったのかもしれない。幼い記憶の中に、父の母である祖母の面影はない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c